
「ジョージ。」

ココナツ・サム

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

「ジョージ。」

【Nコード】

N3340D

【作者名】

ココナツ・サム

【あらすじ】

一度は寝かしつけたはずの夢、アメリカ。ジョージは社会のレールを降り、海を渡る。今時流行らない、古臭い夢に向かって。

1991年3月30日、ほぼ予定通りの午前9時45分、気持ちよく晴れ上がったロサンゼルス国際空港に飛行機はすべりこむように着陸した。

ロサンゼルスに来るのは初めてではない。

仕事からみの旅行で一度、プライベートの旅行で一度来たことがある。

今回が三度目ということになるが、今までと決定的に違うのは、今回は帰る予定がないということだ。

マンションも引き払ってきた。整理できるものは全部整理し、持ってきた。来られないものは皆人にやってきた。

今の俺の全財産はバックパッカーつとポケットにある僅かな金だけだ。

俺ももう26歳、次のチャンスはない。これでダメだったら田舎に帰っておとなしく暮らすつもりだった。

ただ、やってみないまま諦めてしまうのは嫌だった。

何もないゼロからだけど、これからアメリカに住むと決めていた。

「S i g h t s e e i n g . .」

「Y e s .」

「H o w m a n y d a y s ?」

「T e n d a y s .」

「O K ! H a v e a n i c e t r i p .」

「T h a n k Y o u .」

ターンテーブルから荷物を受け取り、簡単な入国審査を済ませると、こちら側とあちら側をへだてるドアに向かった。

「この扉を越えたらもう後戻りは出来ない。」

帰りのチケットは一応持っていたが、それを使う気はなかった。
覚悟はできていた。

躊躇なくドアを抜けると、迎えの人達のざわざわとした声が聞こえてきた。

無論俺の迎えではない。

「やっとここまで来た。」

その時はそう思った。

実はそれからが始まりだった。

「実は俺、子供の頃からアメリカに行きたかったんだよね。」
俺は愛美にそう告げた。

彼女は少しだけ考え込んだようだった。

やがて少し微笑んで言った。

「ジョージがそう思うなら、行けばいいじゃない。やりたいことを
やったらいい。」

2月も終わりにさしかかろうという頃だった。

俺は一月の末で、それまで勤めていた不動産屋を辞めていた。
とは言っても、俺は三年ほど前にその会社を一度辞め、田舎に引っ
込んでいた。

そこで雑誌の編集記者をやっていたのだが、その不動産屋でカナダ
での新しいプロジェクトが進行し、どうしても俺が必要だと言われ、
東京に呼び戻されたのだ。

しかし、あるうことが俺とは関係のないところで別件の事業が失敗
し、会社自体が立ち行かなくなり、二度目の辞表を出した。

仕事を辞めて、少し休んだ後、今後の身の振り方を考えた。

また田舎に帰ってのんびりして暮らす方法もあったが、あそこには
あまり仕事がない。

それに、わざわざ愛美を田舎から呼び寄せて一緒に暮らし始めてい
た。

すでに生活の基盤が出来つつあった。

不動産屋の仕事ならいくらでもあった。それまでの経験を生かすこ
とも出来たし、仕事上の繋がりもあったから、「うちに来いよ」と
言ってくれる奴も何人かいた。

編集記者の経験もあったから、マスコミ関係とか広告代理店なんか

も考えられた。

自分にはそれだけの能力があると思っていたし、やっていく自信もあった。

「俺、十分休んだし、そろそろ仕事探すわ。」

「急がなくていいよ。今まで大変だったんだから、じっくり休んでそれから考えたらいいよ。今すぐ生活に困るわけじゃないしさ。」

「うん、でも、毎日家でごろごろしてるのもさ。俺、家事とかやるわけじゃないし。」

「あら、家事を手伝ってくれてもいいのよ。」

このままでは本当に家事をやらされそうだ。

冗談じゃない、自慢じゃないが俺は家の事は何も出来ない役立たずだったりする。

毎日の家事が大変なのは分かっているが、俺がやっても仕事を増やすだけだ。

家事をやらされる前に仕事を見つけないければ。

空港にはもつといろんな人種がいるかと思っていたが、意外と日本人っぽい人が多い。

フライトが皆同じような時間帯に着くからか、それとも、迎えに来るなんてのは日本人だけなのか。

まあいい、どっちにしても俺には関係のないことだ。

ごちゃごちゃと集まっている人の群れの間を抜け、外へと足を踏み出した。

とりあえずの行き先は決まっている。ダウンタウンのリトル東京だ。そこでなら仕事が見つかりやすいだろうと思ったからだ。

今みたいにインターネットなんてなかった時代だったから、電話と手紙とファックスで寝るところは確保しておいた。一ヶ月400ドルのアパートメントホテルだからどんなところかは大体想像がつくが、しばらくはそこで暮らすことになる。雨露がしのげて、シャワーさえ浴びられれば何とかなるだろう。

何しろ、知り合いも居なければ金も無い、何のあてもなくやってきたのだから贅沢は言っていられない。

アメリカって国は本当に合理的な国で、いろいろと便利なものがある。

乗り合いシャトルバスもその一つだ。

同じ方向に行くもの同士がバンに相乗りして空港から目的地に向かう。

料金は基本的に頭割りだから、人数が多ければ多いほど一人当りは安くなる。

だから、俺たちが乗ったままバンが客を探して空港をグルグル何回も回っても誰も文句を言わない。

ドライバーも、多く乗せればちょっと収入が増えるのだろう、結構辛抱強く回っている。

何しろロサンゼルスは広い。一度どこかに行こうとしたら、1〜2時間は簡単にたってしまう。

一回のトランスファで少しでも多く稼ごうということだろう。

俺たちにしても一人でも増えれば少しは安くなるのでその方が都合がよかった。

結局俺を入れて8人の客を乗せてバンはダウンタウンに向かって走り出した。

ロサンゼルス国際空港を出ると、車はほどなくフリーウェイ405号線に乗り、すぐにフリーウェイ10号線に乗り換える。

高架になっているので結構遠くまで見える。

ここから見る景色は整然として、ところどころに高いやしの木があったりしてとても開放的に、きれいな街並みに見える。

でもそのやしの木の下に行ってみるととんでもない所であることも俺は知っている。

遠くに高層ビル街が見えてきた。あれがダウンタウンだ。

ビルの天辺の方はスモッグで空気が黒く濁っているのがここから見ても分かる。

今日からあそこで勝負するんだ。

「お帰りー。ちようどお茶入れるところだけど、飲む？」

ある日の午後のことだった。

外から帰ってきた俺に、愛美が声をかけた。

「ああ、そういう時間だと思ってシュークリーム買ってきた。」

俺たちが住んでいたマンションは、広くはなかったが日当たりだけは抜群に良かった。

「美味しいねー、このシュークリーム。新しいお店？」

「ああ、一ヶ月くらい前にオープンしたらしい。俺も全然知らなかったよ。」

「どこ？」

「駅前から渋谷側に一本入ったところ。」

「分かりやすい説明をありがとう。」

愛美のことだから、明日あたり自分で見つけてくることだろう。

「でさ、仕事のことなんだけど。」

「うん。」

「今二つまで絞ったんだ。」

「一つはホテルの仕事。もう一つはユニフォーム屋さん。」

「・・・・・・。」

「聞ってる？」

「聞ってるけど、それじゃ全然わかんないから。」

「これから話す。ホテルのほうは、新横浜のホテルのフロント。半分ビジネスホテルみたいなもんだけど。最初は一番下っ端の見習いみたいなところから。もう一つは武蔵小杉にあるユニフォーム屋さんで、デリバリーとルートセールス。いろんな会社でユニフォームとか着てるじゃん。それをレンタルして、クリーニングする会社。ど

「うちもここから通えるし、給料は同じくらいかな。」

「・・・ふーん。ジョージにしては随分地味な仕事選んだね。不動産とかやらないの？」

「それも考えたんだけどさ、なんか、もう派手なことやるのが嫌になつて。地味に、長く働けるようなところを探したんだ。営業だつたら仕事はすぐあるし稼げるだろうけど、俺の性格だからすぐに飽きちゃうだろう。いろいろ考えて、これからは目立たず地道に生きていこうと思つて。誠実に、コツコツと生きてみようと思ふんだ。」

「・・・なるほどね。どういふ心境の変化なのか知らないけど、いいんじゃない？やってみれば？」

「うん。ありがとう。」

それから取りとめもない話をした。

愛美にアメリカの話をしたのはそんな時だった。

今後の方向性も決まつて、気が少し緩んだのだろう。

アメリカ行きの夢は確かにガキの頃からあったが、その想いは寝かしつけたつもりだった。

これからはここでコツコツと働きながら愛美と静かに暮らしていく。そんな絵を描いていた。

想いを憧れにすり替えて生きていけると思つていた。

何より、アメリカ行きなんて非常識な夢を理解してもらえるなんて思つていなかった。

俺にとつては愛美を取るか、アメリカを取るか。

迷うまでもない、愛美に決まつてる。

歳を取つたら、若い頃はこんな夢もあった、そんな風に昔話として話せる日も来るだろう。

自分では割り切れたつもりでいた。

車は見覚えのあるロサンゼルスダウンタウンに入り、殺風景な街を走って独特の雰囲気があるエリアに入った。

「お客さん、ここでいいかい？」

やたら日本語の看板が目立つ街の一角にバンは止まった。

「ああ、ここでいい。ありがとう。」

ここがこれからしばらく住むことになるリトル東京だ。ここなら安宿もあるし、レストランもたくさんあるから何かと便利だろう。治安はそれほど悪くはなさそうだが、一本道路を越えるとやばそうなところもある。

支払いを済ませると、バックパックを担いで歩き出した。目的の宿はここからそう遠くない、数分の距離のはずだ。

このバックパックってやつは便利でいい。

本格的なフレームザックは背負えないが、このバックパックならちよつと大きな縦長のリュックサックといった感じだ。

詰め込めば結構収納力もあるし、何より両手が自由になるのがいい。それに、取り外しのできるデイパックもおまけのようにくつついている。

荷物を降ろしたら、そのデイパックさえ背負えば動き回れるというわけだ。

背中にくつつけてさえいれば、目を離すこともないし、ひつたくれることもない。

もつとも、パスポート以外は失くして困るものもなかったが。

「ここか。」

俺は「さくらホテル」の前に立っていた。この名前もどうかと思うが、まあいいだろう。自分で予約したんだから。

ホテルとは名ばかりの小さなガラスドアを開けるといきなり階段だった。2階が受付らしい。

階段を上がるとパチンコ屋の両替所のような受付があった。

「今日から予約してるんですが。」

ガイドブックにここは日本語が通じると書いてあったので日本語でたずねた。

「ああ、ジョージさんね。一ヶ月ね。400ドル、前払いだよ。観光に来たの？」

おばさんは韓国系だろうか、ちょっとアクセントがあるが流暢な日本語で答えた。

「まあ、そんなとこです。」

「じゃ、ジョージさんの部屋は5階の503号室ね。ここにサインして。」

サインするほどのこともなからう。一目で全部を理解できるような簡単な書類だった。

「これが部屋の鍵ね。こっちが下の入り口の鍵。夜10時になったら閉めちゃうから。鍵を失くしたら150ドルもらうからね。廊下の突き当たりにシャワー室があるよ。タオルと石鹸は自分のを使つてね。シーツの交換は週一回。月ぎめで住むんなら毎月25日までに次の月の分を払って。」

簡単な説明を聞いた後、動きが怪しいエレベーターに乗って、俺は5階に上がった。

「503か。」

廊下の両側にいくつか部屋が並んでいる。昔のアパートみたいな作りだ。

エレベーターから見て右側が奇数、左側が偶数の部屋番号になっていた。

突き当たりにもドアがある。あそこがシャワー室らしい。

まずは荷物を置いて、シャワーを浴びたかった。

愛美にアメリカ行きの話をしてから数日の間、俺の頭は混乱していた。

もしかしたら今、俺にはアメリカに行くという選択肢があるのか？でも愛美はどうする。

理解してくれたとはいえ、何がどうなるか分からないアメリカに一緒に連れては行けないだろう。

メシさえ食えないかも知れない、へたしたらホームレスにだってなりかねないのに。

愛美をそんな目にあわせるわけには行かない。

でもこれが最初で最後のチャンスかもしれない。

このままホテルかユニフォーム屋に就職したら、二度とチャンスはないだろう。

もしあったとしてもその時俺はいくつになっているだろうか。

体力も精神力も持たないに違いない。

何より、泥水をすすするような暮らしには耐えられないだろう。

今行くか、一生行かないか。

一度は寝かしつけたはずのアメリカの夢がむくむくと頭をもたげてきた。

一人で決められることではない。

俺は愛美ともう一度話し合った。

俺が考えていること、心配していること、全部話した。

愛美はただ淡々と聞いていた。

「私、ジョージにはいつまでも夢を追いかけて欲しいの。私のために地味な仕事に就くって言うてくれた時嬉しかったけど、やっぱり

私は夢を追いかけているジョージが好きなのよ。今アメリカに行くチャンスがあるなら行ってみればいいよ。だって最後のチャンスかも知れないんでしょ？」

「私のためにジョージが夢を諦めるって言うなら、私はジョージの重荷でしかないのよ。私はそんなの嫌だし、ジョージらしくないよ。やってみて、ダメだったら日本で大人しく暮らせばいいじゃない。私は大丈夫。大丈夫だから。」

俺は涙が出そうになった。

男のバカな夢を分かってくれるどころか、背中を押してくれる。この女だけはどんなことがあっても一生かけて必ず幸せにする。そう心に誓った。

「分かった。でも、どうなるかまったく分からないところに君と一緒に連れて行くことはできない。だから、俺は一人で行って、死に物狂いで何が何でも絶対にチャンスをつかんでみせる。そして、必ず君を迎えに来る。半年かかるか、一年かかるか、何年かかるか分からんが、必ず迎えに来る。それでいいか？」

何とか搾り出すように、それだけ答えた。

部屋は思ったよりきれいだった。

大きさで言うところ3畳間よりちよつと小さいくらいだろうか、その半分をパイプで出来た簡素なベッドが占めている。あとは、小さいテーブルとテレビ。ああ、テレビはあるんだ……。それに小さなクローゼット。一応窓はあるが、開けてみると隣の建物の壁が目の前にあった。

部屋の端に手洗いくらいの流しと、古い電気コンロがある。これでお湯くらいは沸かせるだろう。

バックパックからタオルと石鹸を取り出してシャワー室に向かった。日本を出る前にシャワーを浴びただけだから、体がべたべたして気持ち悪い。ロサンゼルスは乾燥しているとは言うものの、やはり汗はかく。

シャワー室のドアを開けてみてなるほどと思った。

要するに、部屋も、シャワー室も、学生寮のような作りなのだ。これで一階に食堂でもあれば完全な学生寮だ。

古びたタイル貼りの部屋に、シャワーヘッドがいくつか並んでいる。もちろん日本の銭湯ではないから、立ったまま浴びる。

隣のブースとの間仕切りは申し訳程度にあるが、気休め程度だ。

これで女の子でも居たらどうするのだろうか。

そんな余計な心配をしながらシャワーを浴びた。

着替えて部屋に戻ってから気づいた。

洗濯はどうするのだろうか。近くにコインランドリーとかあるのだろうか。

まあいい、後でおばさんに聞いてみればいい。

洗濯物を取りあえず袋に投げ込み、ベッドに横になった。

ずっと飛行機に乗っていたのと、時差ボケとでくたくたに疲れていた。

腹も減っていたが、少し眠ってからにしよう。

そんなことを考えたか考えないかのうちに眠りに落ちていた。

アメリカに行く決めてから、そのことだけ考えて準備した。
まず仕事のオファーを全部断った。

履歴書を出した所や面接の連絡をもらったところには電話だけで済んだが、ホテルとユニフォーム屋だけは直接担当者に会いに行った。どちらも面接時に俺の話をちゃんと聞いてくれ、俺の想いを分かってくれた上で来いと言ってくれた会社だからだ。

仕事を断りに行っただけの俺の話をよく聞いてくれた。

その上で俺の夢を応援してくれ、もし帰ってくるものがあつたらいつでも来いと言ってくれた。

日本で最後にこんな素晴らしい会社と出会えてよかった。

どちらかを選ぶことなんてできなかっただろう。

この人達の気持ちを決して忘れるまいと心に刻んだ。

一方でチケットの手配に入った。

パスポートはまだしばらく切れないから大丈夫だ。

さて、いつの便にしようか。

身の回りをきちんと整理するには一ヶ月くらいはかかるだろう。

幸い学生時代の友人が旅行代理店に勤めていた。

相談してみたが、安いのは3月末くらいだろうとのこと。

どこのエアラインでもいいから取っておいてくれと伝えた。

さて、そうなる時間は一ヶ月しかないが、逆に言うで一ヶ月もある。

その間ただ準備だけで食いつぶすわけにはいかない。

一ヶ月間だけ出来る仕事を探した。

その結果考え付いたのが警備員だ。

これなら一種のアルバイトだし、給料もそれほど悪くない。

一日働けば一万円くらいにはなるし、いざとなれば日払いもできるのでぎりぎりまで働けそうだ。

目黒の会社と話をつけた。

これからしばらくは日雇いだ。

あまり眠れなかったらしい。時計を見ると夕方の5時だった。

「そうか、目覚ましも買わなきゃな。」

疲れは残っていたが、少しは楽になった。

これからのことを考えたら疲れたなんて言っていられない。

初日は疲れを取って？冗談じゃない。俺にはそんな時間はない。

一日でも早く愛美を迎えに行くんだ。

そう思うとちゃんと体が動いた。

リトル東京という場所を選んだのには理由があった。

安いホテルアパートメントがあるのも理由の一つだが、一番の理由はもちろん日系のビジネスが多いことだ。

ビザもないのにアメリカの会社が雇ってくれるとも思えない。

それに、アメリカ人のやり方が分からないので、いざという時どうなるか不安だった。

日本語が必要、もしくは日本人でなければ出来ない仕事ならチャンスもあるだろう。

永住権を取りやすいと言う話も聞いていたので、レストランに狙いを定めていた。

ここに来るまでの間にも日系レストランはいくらでもあった。

なに、100軒もあたれば一軒くらいは引つかかってくるだろう。

それでダメなら200軒回ればいい。

見つかるまで何軒でも回ってやる。

「今店長がいないので分かりません。」

「うちは今募集してないから。」

「永住権持ってるの？ないならダメだなあ。」

この時間はちょうどディナー営業のオープン前の準備で忙しいのだろう、あまりちゃんと相手にしてくれるところも少なかった。

話を聞いてくれてもこんな返事ばかりが返ってきた。

中には、「うちは今人手は足りてるけど、他で人探してる所があったら声かけてやるよ。連絡先残してきな。」という親切なところもあった。

全然きついとは思わなかった。

飛び込み営業に比べたら楽なもんだ。何しろ、一軒ヒットすればOKなんだから。

必ず雇ってくれるところはある。そう信じていれば、断られるということはダメなところをつぶして行く作業に過ぎなかった。

一軒断られることに、「当たりに近づいている」「次は当たる確率が上がった」と思いながら回った。

30軒くらい回っただろうが、一軒だけ、「今親方が居ないんで分かんないけど、明日の2時過ぎくらいに来てみてくれる？その時間なら居るから。」という店があった。

その店で晩飯を食べた。

まさかアメリカに来て初めての食事がラーメンになるとは。

何故か店の人がギョーザをつけてくれた。気が張っていた時に親切にされたようで、嬉しかった。

その後も何軒か回ったが、芳しい返事はもらえなかった。

日雇いの警備員の仕事ははつきり言って退屈だった。

制服、靴と赤い棒みたいのを渡されて、主な仕事は工事現場の交通整理だった。

最初はいくつかの現場を日替わりで回っていたが、やはりこういう仕事は毎日やる人間が少ないのだろう、そのうちにマンション建築の現場に固定になった。

交通費は一応支給された。

面倒くさいので制服のまま電車で広尾まで通勤していた。

周りの人にも現場の人にも珍しがられたが、別にどうでもよかった。大した問題じゃない。

一方でビザのことをいろいろと調べた。

日本人はアメリカに行くのにビザ・ウェーバーがあり、ノービザで三ヶ月滞在できる。

しかし、三ヶ月では心もとなかった。

観光ビザがあれば六ヶ月は滞在できる（どちらにせよ働けば違法だが）。

さらに、うまく行けば最高一年までは延長できるのだ。

よくよく調べてみると、観光ビザで入国すると、永住権を取る時に（たとえ切れていたとしても）ビザの切り替えという形を取れるらしい。ノービザだと面倒なようだ。

いろいろと知識が増えていく。渋谷の本屋にある関係資料は全部目を通した。

こういう時東京は便利だ。

マンションのオーナーには3月一杯で出る旨伝えた。

敷金がいくらかは戻ってくるらしい。

電話の権利を手放したり、処分できるものは処分したり、いろいろとやらなければならぬことがあった。

しかし、日本を出る出来るだけギリギリにやらなければならない。それまではここで生活するのだから。

愛美をずっとここに置いておくわけにはいかなかった。知り合いも親戚も居ない東京にこのまま居る理由もなかった。何より、生活費が高すぎる。

「大丈夫よ。待つてる間田舎に居るから。」
それが一番いい。それなら俺も安心だ。

そんな頃、旅行会社の友人から連絡が入った。
3月30日の便を取ってくれたらしい。

一応往復チケットで7万円ということだった。

「ところでビザのことなんだが、三ヶ月まではビザなしだろう？それ以上滞在するスケジュールを組めばビザ申請が出来るのかな。銀行残高はどれくらい用意すればいいの？」

調べてくれるとのことだった。

こつという時、持つものは友達だなと思った。

よく寝た。

昨日初日からあれだけ歩いたのが良かったのだろう、夜10時半頃から朝の9時過ぎまでぐっすり寝た。

近くにあるコンビニでテレホンカードみたいなのを売っていたので、昨日寝る前に愛美に電話をした。とりあえずしばらくは妹のマンシヨンに転がり込むことにしていた。

元気そうな声を出していたが、内心は寂しいだろうな。

一日も早く迎えに行くから、と再度約束した。

愛美のことを想って、また、これから始まるという興奮で眠れないかと思っただが、すぐに眠りに落ちた。

俺も案外図太いな。

起きてても仕事を探す以外することがない。

自由なようでいて、退屈なものだ。

レストランというものは、何時ごろから準備に入るものなのだろう？この時間に行ったら瞬間で叩き出されそうだ。

まずは日用品を手に入れよう。

この辺の地理も知っておく必要がある。

簡単な地図は持っていたし、前にも来た事があるので少しは道も分かる。

ダウンタウンの高層ビル街を目印にすれば迷うこともないだろう。

道路を一本一本確かめるようにして歩き出した。

とりあえずの目的地は日系マーケットのヤオハンだ。

他にマーケットらしいところを知らなかった。

歩いてみると、リトル東京というところは意外と狭いエリアである

ことに気がついた。

一本裏に入れば店も何もないところもあるし、ちょっと外れるとホームレスがたむろしているヤバイエリアもある。

暗かったら気づかなかったかもしれないことにいろいろと気づいた。まっすぐ歩けばせいぜい10分くらいの距離であろうヤオハンに着くのには2時間かった。

ヤオハンでは大した買い物をしなかった。

目覚まし時計と、ヤカンと、食べ物少し。あとは洗面用具だ。所持金は限られている。無駄なものを買う余裕はない。

手持ちの残りは2000ドルくらいだった。

残りは全部愛美のところに置いてきた。

これからどのくらい離れ離れで暮らすか分からないのだから、金はいくらあっても足りないだろうと思って必要以外は全部渡したのだ。俺自身には2000ドルくらいもあれば十分だと思った。

これがなくなる前に何とかしなければホームレスだ。自分をそう追い込むことで馬鹿力が出ると思ったのだ。それに、余裕があると思う動が後回し後回しになる。

自分の性格をよく知っていた。

ホテルに帰って味気ない食事を済ませると、もう2時が近くなっていた。

昨日の店に行ってみよう。

身支度を整えてまたホテルを出た。

警備員の仕事もかなり慣れた。現場の人達とも仲良くなった。

こう考えると、逆に現場で働く仕事でも良かったのかもしれない。最初は近くの定食屋とかに昼飯を食べに行っていたのだが、そのうち現場の人に倣って弁当を持っていくようになった。仲間的な意識を持ってくれたらしく、一緒に飯を食うのが嫌じゃなかった。

いろんな話をしながら食べた。楽しかった。

俺のアメリカ行きの話をする、皆応援してくれた。

飯の時にはよく缶コーヒーを飲んだ。誰か彼かがおごってくれた。買いに行くのはほとんど俺の役目だった。

あつという間に時は過ぎる。

いつまでも警備員をやっているわけにもいかない。アメリカ行きの準備をしなければ。

仕事は出発の一週間前で終わりにすることにした。

短い間だったけれど楽しく働けた。ちょっと気に入っていた。

せっかく仲良くなった人達とまた別れるのは寂しい気もしたけれど、そうも言っていられない。

最後の日に皆で焼き鳥屋に連れて行ってくれた。

よく食べ、よく飲んだ。

とつつきづらい職人さんたちだけど、仲良くなってみるとこんなにいい人達はいない。

皆がそれぞれ昔持っていた夢の話をしてくれた。

そうか、やっぱり皆夢はあったんだ。だから、夢に挑戦する俺を応援してくれるんだ。

その日は気持ちよく酔った。

その一方で観光ビザ申請について旅行会社の友人から朗報が入った。

「残高証明を出して申請してもいいけど、それだと長い期間旅行することになり、却下される可能性がある。もっと簡単に、しかも断られない方法がある。」

耳寄りな情報だった。

「ビザウェーバーっていうのはさ、日本も含めてアメリカに認められた国っていう条件があるんだけど、もう一つ、認められた航空会社を使わなければならないっていうルールがあるんだ。だから、それ以外の航空会社を使えば、観光ビザが“必要”ってことになる。」

「日本から飛んでる便で、認められてない会社ってあるのか？」

「ない。だから裏技があつたのさ。」

「ヤバイことは嫌だぞ。」

「違う違う。実はカナダ経由で入国するんだよ。カナダもビザウェーバーの対象国なんだが、実はカナダからアメリカに飛んでいる便って言うのは、実際は殆どが下請けの会社なのさ。元請は認められている会社でも、下請けの小さな会社までアメリカはいちいち審査しない。ということは、ウェーバーの対象外になり、ビザが必要となるって言うことさ。」

「なるほどな、でも俺のチケットはもう取ったんだろう？それをカナダ経由に変えるのか？」

「ビザ申請にはチケットの現物は必要ないんだ。予約確認書だけあればいいのさ。そんなもの、いくらでも作ってやるよ。」

道が開けた。

「昨日お邪魔したジョージと言います。親方にお会いできますか。」
昨日のウェイトレスが居た。

「えーと、ちょっとお待ちください。ヤマさん！朝言ってた人来たよー！」

出てきた人を見てちょっとだけ後悔した。

どんな人かというと、背は低いが太っている。赤いトレーナーを袖まくりして、エプロンをしている。

そこまではいいのだが、何しろ人相が悪いのだ。特に目つきがヤバかった。

「おう、じゃあ、ちょっと座ってまってて。」

座らずに逃げようかと思った。

「お待たせ。で、何？働きたいんだって？」

入り口から遠い席に案内されて、逃げられなかった。

「はい、ここで働かせてもらえないでしょうか。」

「レストランで働いたことある？」

「ないですけど、どんなことでもやります。仕事も死んだ気で覚えますから、お願いします。」

「経験ないのか・・・ま、いいや。で、永住権は持ってるの？」

「持ってます。観光ビザです。」

「ビザなしか。前はどこで働いてた？」

「日本です。」

「日本って、いつロサンゼルスに来た？」

「昨日着いたばかりです。」

「昨日！？昨日の今日で仕事探してるのか！？」

それまではユルユルに座っていた親方が座りなおして身を乗り出してきた。

「昨日の今日じゃなくて、昨日から探してます。腹くくって来てるんです。」

俺の本気が通じたのかどうか、親方はちょっと考え込んだようだった。

やがて口を開いた。

「よし、じゃあテストしてやる。明日の8時ごろもう一回来れるか？」

「もちろんです！」

どきどきしていた。何というラッキー。僅か二日目にして手応えがあった。

雇ってもらえるかどうかは分からないけど、少なくともチャンスはもらった。

どんなテストかは分からないけど、ダメで元々だ。やってみるしかない。

調理の経験はまったくないけれど、包丁で手切るくらいは何てことはない。

チャンスをもに出来るかどうか。なりふりかまわず必死にしがみついてやる。

その足でまたヤオハンに向かった。

日系の本屋に行って、閉店までずっと調理の本を見た。

付け焼刃ではどうにもならないだろうが、何かせずにはいられなかった。

警備員の仕事も終えていよいよ渡米の準備だ。

と言っても大してやることはない。

荷物を整理してマンションを引き払う準備をするくらいだ。

俺個人のもので持っていていけないものは全部捨てた。

正確には全部じゃない。写真と音源だけは箱に入れて愛美の妹の住所に送った。

電化製品は買ったばかりだったので売るのも捨てるのももったいないからやっぱり送った。

後は愛美の物を荷造りすれば終わりだ。

簡単な調理器具だけ残して全部片付いた。なに、食事はいざとなったら外食でもいいし、弁当を買ってきてもいい。もう一週間しかないのだから。

ビザの取得はうまくいった。

知り合いの不動産屋に休暇証明書を作ってもらい、友人に送ってもらった飛行機の予約確認書を持って六本木のアメリカ大使館に行った。

あまり汚い格好をしていくと怪しまれるかと思い、ダブルのスーツを着ていった。必要もないのに帽子をかぶり、サングラスもしていた。今考えるとかえって怪しい。

大使館の入り口の警備員に何故か全部英語で話された。

ビザは拍子抜けするほどあっけなく下りた。

六本木と広尾はそれほど遠くない。

警備員として行っていた現場の人達にお別れを言っておきたいと思った。

現場の近くまでタクシーに乗り、一番近いコンビニで降りた。

缶コーヒーを20本くらい買ってお土産にした。それが一番いいと思った。

現場に着くと、最初は皆「誰？」という顔をしていたが、俺だと分かる仕事の手を休めて集まってくれた。

「どうしたの、その格好？」

それが一番の話題だった。

「いや、大使館でビザ取ってきたんで。」

「そうかあ。もうアメリカ人みたいだな。」

あまり面白くないギャグだが、気持ちは伝わってきた。

お土産の缶コーヒーを置いて現場を後にした。

皆、ありがとう。俺、頑張るよ。

8時に来いと言われて8時に行っても気持ちは伝わらないだろう。例え無駄でも先に行って待っているくらいでなくちゃ。

その日は7時半から行って待っていた。

親方は8時を5分ほど過ぎてやって来た。

「おう、もう来てたのか。入れ。」

とりあえず親方の後について店に入った。

「今日はまだしばらく誰も来ないからよ。その間にテストをする。」

さあ来た。ここが勝負だ。

「その戸開けたら道具入ってるから。トイレ掃除してみる。」

は？トイレ掃除？

「トイレ掃除って、それがテストですか？」

「そうだ。」

トイレ掃除・・・なんだ、そんなことか。

それくらいのことなら楽勝だ。そのくらい苦でもなんでもない。何しろ、「何でもやる」と言い切ったんだからな。

本当にどんなことでもするのか、汚い仕事でも嫌がらずにやるか、きちんとやるか。見るのはそんなところだろう。

どれくらい時間をかけていいのか分からないが、俺がどれだけ気合が入っているか見せてやる。

とは言ってもトイレ掃除なんてしたことがなかった。それどころか子供の頃から自分の部屋を片付けるのさえ嫌だった。

どこから手をつけたものか・・・。

まあいい、とりあえず始めてみよう。

やってみると色んなことが分かった。

壁を洗っていたら、上からやると洗剤が流れてどこからどこまでどのくらい綺麗になったのか分からない。下からやればいいんだ。洗いやすいところは丁寧にやりやすいが、そうでないところこそ丁寧にやらないと綺麗にならない。

汚れが落ちないところは洗剤をかけておいて、しばらく置いてからやると落ちやすい。

それにしても、一見綺麗に見えたトイレも細かく見ると結構汚れているもんだ。

裏の見えないところや手の届きにくいところは一回も掃除してないんじゃないか。

やっているうちにちょっと面白くなった。どんどん綺麗になっていくのが楽しかった。

「俺、掃除のプロになれるんじゃないか？」などと一人でふざけてみた。

気がつくと1時間半くらい経っていて、全身汗まみれでぐしょぐしょになっていた。

ビザも取れた。準備もほぼ万端整った。後は出発を待つだけだ。出発は3日後に迫っていた。

期待半分、不安半分といったところか。

だが、3日後に出発という事は、3日後からはしばらく愛美と離れ離れになるということでもある。

ここしばらく渡米準備で愛美とはどこにも遊びに行っていなかった。

今日は遊園地に行くことにした。

しばらくは一緒に遊べないからな。丸一日遊園地で過ごして、どこかでディナーを食べて帰ってこよう。

ここ何日かゆっくり起きていた俺が早起きしたので愛美は怪訝な顔をしていたが、「遊園地に行こう」の一言で急に明るい顔になり、そそくさと支度を始めた。

俺がコーヒを飲んでいると、準備が出来てしまったのか、子犬のようにそばで待っていた。

「分かった。すぐ支度する。」

急いでコーヒを飲み終えた俺は軽くシャワーを浴びて支度を整えた。

今日は寒い。2人とも厚手の皮ジャンを着て出かけた。

簡単に遊園地と言うが、どこも結構遠い。

東京の中心部の道は熟知していたが郊外の道を知らないし、渋滞にはまると嫌なので電車で行くことにした。

東横線で渋谷まで出て山手線に乗り換える。新宿から京王線に乗った。

東京の遊園地は三カ所しか知らなかったが、愛美が一番遠いランドには行ったことがなかった。

新宿に行くまでは混んでいたが、朝なのでそこから郊外に向かう電車はガラガラだった。

「へへ。実はお弁当作ってきちゃった。」

東京の電車の中でお弁当・・・田舎の電車じゃないんだから。おにぎりが美味しかった。

電車の中で昨日会いに行った人の話をした。

「学生時代に、俺は直接教わったことないんだけど他の科を教えていた人がいて、今東京に居るんだ。昨日その人に会ってきたんだけど、ロサンゼルスに行くって言ったら大反対された。」

「普通は反対するわよね。」

「そうじゃないんだ。アメリカに行くのはいいけど、どうせ行くならニューヨークに行行って。ギリギリ譲ってもアトランタとかその辺に行かなきゃダメだって。ロサンゼルスとかその辺は馬鹿しかないから、お前も馬鹿になるぞって言われた。」

「そうなの？」

「そうなのかも知れん。」

多分それが正しいのかもしれない。何しろ俺がロサンゼルスを選んだのは、天気が良いという理由と、遊園地が多いからという理由なのだ。さすがにこれはその人には言えなかった。

でもニューヨークに行くなら東京に居た方がいい。

バリバリのビジネスマンをやる気はないのだ。

俺のイメージするアメリカは、カリフォルニア、ロサンゼルスだったのだ。

「どうだ、そろそろ終わったか？」

親方が声をかけてきた。後は道具を片付ければ終わりというところだった。

「後は片付けしたら終わりです。」

「見せてみる。」

親方が入ってきた。ただでさえ悪い目つきがさらに厳しくなっている。

さあ、どうだ。やるだけのことはやった。

親方は入り口から入って来ず、そこに立ったまま見回している。

「おい。」

来た。こういう時によくある話だが、掃除したところを舐めると言うなら舐めてやる。いくら掃除してもトイレはトイレだ。汚いことに変わりはない。だが、舐めてもおかしくないくらい綺麗にしたし、雇ってもらったためならそれくらい出来る。死にはしないだろう。

「エプロンのあるところ教えるからこつち来い。」

肩透かしをくらった。普通こういう時には何か一言あるんじゃないのか。

あれ？ちょっと待て。エプロンの場所を教えるということは、それを着て仕事をしろという事じゃないのか？俺、雇ってもらえるのか？

「はい！」

こうして渡米二日目にして俺の仕事が決まった。

いつの間にか他の人も来ていた。

「おい、今日から入ったジョージだ。」

皆に紹介された。中には日本人じゃないのもいるようだ。

「よろしく。」

「頑張れよ。」

「Habla Español?」

待て。今何と言った？日本人か日系人らしいが、何と言ったのか分からなかった。

英語は結構出来るつもりでいたが、俺程度では現地では通用しないのか。

言葉が通じない理由は間もなく分かった。

奴はメキシコ人だったのだ。だから、スペイン語で話しかけてきたらしい。

キッチンで働いている人数の半分以上がメキシコ人だった。

それだけではない。親方も、他の日本人もスペイン語混じりでしゃべっている。

参ったな。聞いてないぞ。何でアメリカなのに英語じゃないんだ。

と言うより、何でメキシコ人がこんなに多いんだ？スペイン語を覚えないと仕事にならないぞ。

遊園地では久々に羽を伸ばした。とにかく俺はローラーコースターが好きなのだ。

愛美も俺と付き合いだした頃は苦手だったのが、今では俺以上のローラーコースターマニアになっていた。

中はそれほど混んでいなかった。乗りたいものは全部回れた。

午後3時くらいになってようやく一休みとなった。

気がつくとそれまでずっと手を握っていた。

夢中で遊び、笑って過ごした一日だった。

やっぱり俺も張り詰めていたんだな。段々とほぐれていくのが自分でも分かった。

何より、愛美の楽しそうな顔を見るのが嬉しかった。

考えてみればこの一ヶ月というものの、アメリカ行きの事ばかりで俺も愛美もあまり笑わなかったと思う。そういう意味でもやっぱり来て良かった。

さすがに遊び疲れて、7時頃遊園地を後にした。手をつないだままだった。

電車の中では2人ともちょっとウトウトした。

渋谷で食事をすることにした。

こんな時間に街をブラブラするのも久しぶりだ。

相変わらず人が多い。でもこんなに人が沢山居ても、俺みたいな無茶なことをしようとしているのはこの中で俺一人だろう。

いつも外食だとステーキやパスタなどの洋食を好む俺だが、この日はわざわざ和食屋に入った。

居酒屋ならともかく和食は高いイメージがあるが、もうすぐ美味しい和食が食べられなくなると思ってちよつと無理をした。案の定値段はちよつと高かったが、その分美味しかった。今度こんなに美味しい和食を食べられるのはいつになるだろう。

家に帰り着くとくたくたになつていたが、不思議と目はさえていた。2人でコーヒ―を飲みながらテレビを見た。

今日一日で精神がリセットされて、これで戦う準備が本当に出来たと感じた。

まだ手をつないでいた。

結構広い店だった。カウンターなしのテーブル席のみで40〜50席はあるだろうか。その割りにキッチンが狭い。人とすれ違うのが難しいほどのスペースしかない。

そのキッチンの端で、俺は体を折りたたむようにして皿を洗っていた。

忙しくて目が回りそうだった。

実際は俺自身は下がってきた皿を洗っているだけで大したことはしていないのだが、どんどん皿を洗っていかないと注文に間に合わないくらいだった。

何をどうやっていいのかまったく分からない。回りを見ている余裕などなかった。何がなんだか分からないうちに時間が過ぎたらしい。ランチタイムが終わった頃声がかかった。

「休憩行つて来い。2時間な。メシ、何食うんだ？」

2時間も休めるのか。助かった。メシも食える。

「ラーメン食います。作り方教えてください。」

食べ物屋ならまかないでメシが食えると思っていた。思っていた通りだ。

毎日のことだからこれは助かる。

「よし、じゃあ今作るの見てろ。麺をほぐしながら鍋に入れる。箸ではあーっと泳がせる。その間に丼にタレを入れる。このレードルで一杯だ。時々麺の様子をこうやって見てやる・・・もう少しだな。麺が上がるくらいになったら丼にスープを張る。この線くらいまでだ。見てみる、麺の上がりはこれくらい、このくらいになったら麺を上げて・・・箸でスープと馴染ませる。後はトッピングして出来上がりだ。」

・・・簡単そうに言うが、どうやって麺を上げたのか全然分からなかった。平たいザルに取っ手がついたようなので鍋をバシャバシャ

やったかと思うとザルに麺が乗っていて、それをくるくると回したかと思うとパシッパシッと小気味良い音で麺を湯切りした。

本当はちゃんと作ってもらったラーメンを食いたかったが、俺はこれを仕事にするんだ。一日でも早く自分で作れるようにになりたい。でも、皿洗い初日の俺がラーメンを作らせてもらえるのはいつになるか分らない。でも、自分で食うものなら文句はないだろう。よくテレビとかでやってるじゃないか。こっそり練習してチャンスを待つつてやつさ。

自分で作ってラーメンを食べた。
今まで食べた中で一番まずいラーメンだった。

メシを食った後、休憩返上で、とカッコいい事を言いたかったが無理だった。とにかく休みたかった。この後店は9時までであるんだ、休まないと体が持たない。
時間まで裏で寝た。

いよいよ出発は明日に迫った。

今日はいろいろとやることがある。

朝一番で段ボール箱に詰めた荷物を近くのコンビニから宅急便で田舎に居る愛美の妹の家に送った。大したものはなく、ダンボール5箱くらいだった。他のものは既に送ってあった。

マンションの管理人立会いの下、部屋を引き払った。敷金は愛美宛に送ってもらうようにした。

そうになると、俺たちの持ち物は俺のバックパック一個と愛美の小さなスーツケースとハンドバッグ一個になった。

電車で横浜に出ると、まずは荷物をロッカーに預けた。

もう俺たちに住所はない。今晚は横浜市内のホテルに泊まる予定だった。

お茶を飲んでから、電話加入権を買い取ってくれる店に行った。何万円かにはなった。これで俺たちにはもう連絡先すらない。

ところが不思議なもので、もう何ヶ月も連絡を取って居なかった友達から昨日の夜電話が来ていた。

誰にも言わずひっそりと姿をくらます積もりでいたのに、虫の知らせというやつだろうか。

とにかくつかまってしまったものは仕方がない。俺はアメリカ行き の件を話し、今晚横浜市内で会うことになっていた。

銀行に行き、口座を解約して、そのまま新しく愛美の口座を作つてすべてそこに金を移した。

20万円と、さっきの電話加入権の分を足した分だけを米ドルに両替した。これからこれが俺の全財産となる。

「もつと持つて行けばいいのに。何があるか分かんないよ。」

それは確かにその通りなんだが、どうせ最初から無茶な事をしようとしているんだ。一年か二年くらいなら働かずに暮らせる金はあるが、遊びに行くんじゃない。

これでダメならいくらあってもダメだよ。

ホテルにチェックインして荷物を置くと、愛美を連れて待ち合わせの場所に向かった。

奴は先に来て待っていた。

「おう。」

「おう。」

「それ、誰よ？」

こいつとは15歳の時からの付き合いだ。もう何ヶ月も連絡を取っていないく、会うのは一年ぶりくらいだというのにこの挨拶だ。

「これ、愛美。こいつ、山本。」

「はじめまして、愛美です。」

「ああ、はじめまして。」

山本のことは愛美に話してあった。とんでもない奴だと言うことも。

その日は居酒屋で食って飲んだ。

ずーっとくだらない話ばかりで、アメリカのことは殆ど話に出なかった。

奴は奴なりに気を使っている積りなのだろうか。

それにしても、最後の日にこいつと会うとはな。これも腐れ縁つてやつか。

こいつとはどんなに環境が違っても、どこに居てもいつも付き合ってきた。

こんな仲間が俺にはあと二人居る。

そいつらにもよろしく伝えるように言って別れた。

最後の夜は愛美と二人きりでゆっくり過ごそうと思っていたが、こんなことになっちまった。まあいい、まだ時間はある。
その後ホテルのバーで二人で飲みなおした。

休憩が終わってキッチンに帰ってみると、ちょっと人数が減っている。皆交代で休憩に行くらしい。

店も忙しい時間は終わっていたので、俺はたまっている皿を洗いながら周りを見てみた。

なるほど、ギョーザを巻いたり野菜を切ったりと、仕込みをしている。

隣のメキシコ人に話しかけてみた。早口でスペイン語と思われる言葉をまくし立てられた。

英語はほとんど分からないらしい。

ダメだ、こりゃ。やっぱり俺がスペイン語を覚えた方が早そうだ。

ディナータイムはランチとは違って一気にお客が来ない。

その代わり、ずっと続けて客が来る。

忙しいのは忙しいし、ずっと気が抜けないのだが、ランチタイムほどではなかった。周りを見る余裕が少しだけあった。

見ているのも何が起きているのか全然わからないし、何をどうやっているのか皆目分からないのだが、一つだけ気づいた。こいつら皆魔法使いだ。でなきゃあんな風にできるもんか。

結局何も出来ず足手まといなまま一日が終わった。まあ初日はこんなもんだろう。明日以降もしばらくは多分同じだろうが。

嬉しい誤算が一つあった。というのは、昼メシだけでなく晩飯も食わせてくれるのだ。

休憩している暇はないが、交代で代わる代わるメシをかき込む。

落ち着かないとか言ってられない。メシが食えるだけでラッキーだ。これなら、仕事の日は食うものには困らないじゃないか。いや、休みの日でも腹が減ったら仕事にくらいいい。どうせやることなんて

ないんだから。

そう言えば、給料がいくらとか、休みがいつとか一切聞いてないな。まあいい、今日は最終面接のつもりで来たから、いきなり働くとは思ってなかった。

その辺の話はおいおいしよう。使い物にならないうちに給料の話をするのも気まずいし。

汗と油でドロドロになって一日が終わった。疲れていたし、体がベタベタして気持ち悪かったが、不思議と気分はすっきりしていた。

「お疲れさん。明日から10時半に入ればいいから。お前、どこに住んでるのよ？」

「そのさくらホテルです。」

「そうか、じゃ、気をつけて帰れよ。」

皆エレベーターで地下の駐車場に降りていった。

俺はタバコに火をつけて、のんびりと階段を下りていく。

わくわくしていた。仕事が決まったと愛美に言ったら驚くだろうな。タバコを吸い終わる頃、ホテルに着いた。

昨日はちよつと飲みすぎたかもしれない。
起きたらすつかり日が高くなっていた。

今日出発なのだが、まったく実感がない。

横浜駅まで十分歩いていける、立地のよいホテルだった。その割りに値段は高くない。

と言ってももう泊まることはないだろうが。

簡単に朝食を済ませてホテルをチェックアウトした。

どうせやることもないし、早く成田に着いておくことにした。

横浜駅まで二人で歩いて行き、成田行きの切符を買う。時間が読める分、電車が一番確実だ。

乗り込むと、バカでかいスーツケースを持った沢山の旅行者が居た。せいぜい一週間程度の旅行であるのに、そんなに荷物があるものなのか。

俺のバックパックもでかい積もりでいたが、連中のスーツケースの方が全然大きかった。

成田に着くと、エスカレーターを乗り継いで空港へと上がって行く。ちよつと早いかもしれないが、チェックインできるだろうか。

荷物を預けてしまえば身軽になる。

先に俺のチェックインを済ませてから、国内便のチェックインカウンターに向かった。

実は成田からは国内便も出ている。一日一本だが、俺たちの田舎行き飛行機もあった。

先に羽田から愛美を見送つてということも覚悟していたが、成田便が取れてよかった。

愛美の便の方が少し出発は早い、出国審査などもあるし、俺の方

が先にゲートの中に入ることになるだろう。

とりあえず成田には滅多に来ることがなかったので、ぶらぶらしてみた。

お土産屋やら本屋やら結構店はあったが、どうにも分かりづらい空港だ。

「ちょっと待ってて。」

愛美がお土産屋みたいなところに入っていく。誰に土産を買うと言うんだ。

何軒か冷やかしながら、俺は本屋で雑誌を一冊と文庫本を二冊買った。飛行機の中で読むつもりだったが、どうせ寝てしまうだろう。向こうについて、日本語が恋しくなったら読めばいい。

物珍しくていろいろ歩いてみたものの、すぐに飽きた。

それほど腹も空いていなかったので、お茶しながら時間を潰すことにした。

しかしこの空港の店と言うのはどこに行っても何でも高い。

カフェテリア風の店に入り、コーヒーとケーキを注文した。

しばらくはタバコを吸いながら話をしていたが、どうにも話が弾まない。

時計ばかり何度も見てはタバコをふかす。

離れ離れになる時が刻々と近づいていた。

そのうちに俺はバッグからペンとノートを取り出して、愛美に手紙を書くことにした。

目の前に座っているけれど、口ではなかなか伝えられないこともあるし、何より手紙を残せば、愛美は何度でもそれを読む事が出来る。愛美はテーブルの下で何やらごそごそやっている。

「これ、手紙書いた。」

「あ、あたしへの手紙だったの？何か作業してるのかと思ってた。」
へたくそな字で書いた手紙を愛美に渡した。

「じゃ、あたしからもこれ。」

愛美は小さな箱を出してきた。

開けてみると、小さな写真立てに俺達二人の写真が入っていた。

「さっきの店で買ったんだ。これ見て頑張つて。」

写真立てごと上着の胸ポケットにしまった。

よくアメリカの映画なんかで、出先に行っても家族の写真を持って行ってベッドサイドに置いたりしているが、ああいうのを見ていたんだな。もちろん、大事に毎日見るさ。

そうこうしている間に出国審査の時間が迫っていた。

お互い口に出しては言わないが、それは二人が離れ離れになる時が迫っているということだった。

二日ほど経って、親方に呼ばれた。

「リュウさんだ。うちの会計をやってもらってる。」

リュウさんは所謂華僑というのだろうか。日本で生まれ育って、もちろん日本語もペラペラだし、見た目も日本人そのものだ。

そのリュウさんから説明を受けた。

「給料は月に手取りで\$1200ドル。その他にちよつとチップが入るから。休みはとりあえず週一回だな。仕事の事はヤマさんに聞いてもらうとして、チェックでいいの？」

チェックと言うのは、小切手で給料を払うという意味らしい。

「まだ銀行口座作ってないんで。今度の休みにソーシャルセキュリティ取って口座作ってきます。」

実は俺がビザにこだわったのは、このソーシャルセキュリティナンバーのためだった。

この番号があれば銀行口座も作れるし、税金を納めることができる。税金を納めていないと、永住権を取った時にそれまでの分を全部払えと言われた、という話を聞いたことがある。一度に払うのは苦しいが、毎月ちゃんと払っていれば、後で苦労なくて済む。

それにしても、拍子抜けするほどまともな条件だ。

ビザなしだと、もつと安い給料でハードにこき使われるのかと思っていた。

店でメシは食えるわけだし、部屋代とタバコ代くらいしか金はかからない。思っていたより全然楽だ。

後で聞いた話だが、実は店で働いている日本人の半分は永住権もビザも持っていないかったらしい。

もちろん、働いているメキシコ人は皆非法移民だ。

なるほど、俺がビザなしでもまともに扱ってくれるわけだ。

それからしばらくは、毎日同じことの繰り返しだった。

朝起きて、仕事に行って、皿を洗って、親方に怒鳴られて殴られてメシ食って休憩してまた皿洗って。掃除してクタクタになって帰って寝る。それを単調に繰り返していた。

ドラマチックなことなどそうそうあるものではない。ある意味退屈とも言える毎日だった。

ただ、毎日ものを考える暇もないほど忙しいのと、体が限界近くまで疲れていたので、退屈なことにすら気がつかなかった。

店の人もある程度打ち解け、仕事のペースにも慣れてきた。相変わらず皿洗いと、少しラーメンのトッピングやオーダー通しをやらせてもらえるようになっていた。オーダーに合わせて皿や井を出したり、ご飯を盛り付けたり、少しづついろんな事をやらせてもらえるようになったが、全然他の人達のペースに追いつけず、怒られ続ける毎日だった。

「俺は進歩しているのか？」

と、ふと冷静になった時に考えては自己嫌悪に陥った。

カフェを出て、愛美と二人で出国審査に向かった。二人とも無口だった。

出国審査をするところはちょっと広くなっているが、柵があつて、ここから先は俺しか入れない。

パスポートとボーディングパスを見せてセキュリティを通る。

愛美とは5メートルも離れていないのに、随分遠くに感じる。

ここで書類を書いてから出国審査を通るのだが、この場に及んで愛美の目の前で事務的な作業をするのは何だか中途半端な感じがしてもどかしかった。

書類を書いてから、柵越しに愛美と向かい合った。

寂しそうな笑顔を見るのがちょっとつらい。

「じゃあ、先に行くから。」

先に飛行機に乗るという意味と、先にアメリカに行っている、という意味をかけていた。

「うん、元気でね。頑張つて。向こうに着いたら一回電話ちょうだい。」

「うん、分かった。先に行つて、必ず迎えに来るから。半年かかるか一年かかるか分かんないけど、必ず迎えに来るから。」

「うん、待つてる。待つてるよ。」

その時だった。

「ひーん。」

愛美が俺にしがみついて、一瞬だけ泣いた。

今回のことで今まで一回も涙を見せたことはなかったのに、愛美が初めて泣いた。

今までずっとガマンしていて、今もガマンしているのだろう。それが、抑えきれなくなつて溢れ出たのか。そんな愛美があらためていとおしくなつた。

人目もはばからずにキスをした。

出国審査は空いていて、すんなり通れた。
ここを過ぎたらもう外国になる。

係員の横を通り過ぎて、振り向いてみた。

愛美の姿が見える。まだそこに居て手を振っていた。

一瞬掛け戻りたい衝動にかられたが、軽く手を振って先に進んだ。
そこから先は一度も振り向かなかった。

その後一カ月程は何事もなく店で働いていた。

そろそろ5月も終わろうかという頃、事件があつた。俺がアメリカに来てから、仕事が決まったことを除けば唯一のドラマチックな事件と言つていい。

ランチタイムも終わつて、皆一息ついた時だつた。突然何人もの制服を着た係官が店に入ってきた。

「移民局の者だ。しばらく誰もこの店から出ないように！」

噂には聞いていたが、俗に言う「手入れ」だ。そうそう来るものではないと聞いていたが、まさかもうこの店に来るとは。

休憩していた何人かのメキシコ人が裏口から走つて出て行つた。

俺はキッチンに居たので出られない。

ああ、俺のアメリカの夢もここまでか。覚悟はしていたが、こんなに早いとは。「強制送還」という言葉が頭を駆け巡る。

いつの間にか表口も裏口も係官で固められている。

店の責任者として親方のヤマさんが係官と話をしているが、ヤマさんは10年以上アメリカにいるくせに英語が殆ど話せない。ウェイトレスの一人が通訳として一緒に話している。

お客も足止めされて、戸惑っている。

ヤマさんが話している間に他の係官がキッチンに入ってきてメキシコ人一人一人に順番に質問している。キッチンの入り口と店の入り口を二重に固められているので、これでは逃げ出せない。

皆カタコトの英語とスペイン語で話しているが、ポケットから何かを出して係官に見せている。あれは？グリーンカードか？奴ら、永住権を持っていたのか？

やがて一人だけメキシコ人が係官に両脇を固められて連れられてい

った。奴はグリーンカードを持っていなかったらしい。
メキシコ人全部を調べ終わって、さあ、次は俺の番だ。
さあ、最後の時だ、と覚悟した。

・・・係官は俺の横を素通りしていった。

あれ？どうしたんだ？俺だけ後から調べられるのか？ドキドキした。
捕まえるならさっさと捕まえてくれ。生殺しみたいなのはごめんだ。

結局最後まで俺は調べられず、係官の責任者みたいなのが紙を一枚
ヤマさんに渡して帰って行った。不法移民を働かせていたというこ
とで、罰金を払わなければならないらしい。

「ヤマさん、俺、何でか知らないけど移民局に調べられなかった。
助かったよ。」

まだドキドキしていた。

「バーカ、あいつらは日本人は捕まえないんだよ。ビザ持ってる奴
とか税金払ってる奴が殆どだからな。ま、メキシコ人狩りみたいな
もんだ。どうせあいつら強制送還されても明日には戻ってくるのに
な。」

「でもよかったね。グリーンカード持ってる奴ばかりで。」

「あんなもん偽物に決まってるじゃねえか。あいつらの住んでる辺
りに行けば売ってるんだよ。」

そういうもんなのか。

でも助かった。寿命が5年くらい縮んだような気がする。ギリギリ
で俺の夢は先へとつながった。

この調子なら捕まらずに行けそうな気がする。働いてる瞬間を押さ
えられない限り、一応観光ビザは持ってるので六カ月間は不法滞在
にはならない。

出国審査が済んでゲート前に着いても、すぐに飛行機が飛ぶわけでもないし、搭乗自体がなかなか始まらない。飯も食ったし、お茶も飲んだし、やることがないのでタバコばかり吸っていた。

そういえばと思って、免税店でタバコを1カートン買った。何しろ安い。

さっき買った雑誌をパラパラめくっていたらやっと搭乗開始になった。

それほど乗客も沢山はいないようだ。

俺の席は飛行機の後ろの方、左側の窓際だった。隣が空いていて、通路側におっさんが一人座っている。

さっきの愛美との別れでエネルギーを使い果たしたのか、感慨は特になかった。気の抜けたような状態だった。しばらくは見られないであろう日本の景色も目に入らず、ぼんやりと外を眺めていた。

やがて安全のための何とかというビデオが流れて、飛行機が動き出した。日本の地に居られるのもあと僅かだ。

飛行機は滑走路に入り、一拍置いてから出力を上げる。エンジンの音が大きく響き、するすると動き始める。重力が後ろ向きにかかり、体がシートに押し付けられる。

ちよつと機首が上がったかと思うと、飛行機はふわりと飛び立った。とうとう日本から離れたのだ。

さらば！日本！

ちよつとだけこみ上げるものがあつたが、それもすぐにおさまった。

飛行機が水平飛行に移ると、ほどなく食事が出た。いつ食べても飛行機の食事は中途半端だと思う。けしてまずくはないし、もちろん

うまくもない。量的に少なく見えるが、足りないわけでもない。そのくせカロリーだけは高い。

今回のフライトでは友人がふざけてローコレステロール食のリクエストを入れていた。フライトアテンダントが俺の食事だけ別に運んできたのでちよつとだけ恥ずかしかった。

それほど腹は減っていなかったが、とりあえず食べることにした。

この先食べられなくなるかも知れないから今のうちに食べておこう。

食事が終わると隣のおっさんがウイスキーを飲み始めながら話しかけてきた。

「よかつたら飲む？」

「ああ、いいです。ありがとう。」

「一人？俺も一人なんだよね。」

あなたと旅の道連れになる気はない。

「チケット、六万八千円だった？」

「ああ、そうですね。」

おっさんはよほど退屈なのだろうか、いろいろと俺に話しかけてきたが、俺があまりにそっけないものだからそのうち飽きて眠ってしまった。

俺もしばらく音楽を聞きながら雑誌の続きを読んでいたが、やっぱり飽きて寝てしまった。

一人旅はつまらないと思い知った。

ヤマさんは人間的には滅茶苦茶な人だった。

昼間平気で店から居なくなるし、忙しくなければ俺一人キッチンに残して表でしゃべっているし、夜、店の金を持ったまま飲みに行ったりしていた。金が足りなければそこから払ったりした。

もうすぐ40歳になろうとしているのに結婚もせず、若い子たちを連れて遊びに行くなどしょっちゅうだった。

ただ面倒見だけはよかった。

俺もシフトの関係で車で30分ほど離れた支店に行かされることがあったが、その時は嫌な顔一つせずに送ってくれた。もちろん帰りも乗せてくれた。

自分が本店勤務の時でも俺を送って、帰りの足はきっちり他の人間に頼んでくれた。

休みの日にわざわざ呼び出されて、何事かと思って行って見たらメシに連れて行ってくれたこともある。

決して人間的には尊敬できる人物ではないが、何故か親しみが持てた。言うなれば子供みたいなもので、裏表がまったくなくて、思ったままに行動するのだ。

そんなヤマさんだが、腕だけは抜群にいい。

例えばラーメンを作る時、タレを決まったレードルで入れて、スープを決まったお玉で入れる。それぞれ量が決まっているので誰が作っても同じように出来そうに思うが、何度作ってもヤマさんにはかなわなかった。同じにやっているはずなのに、どうしてこんなに違うものかと思ったものだ。

相変わらず俺は毎日怒鳴られ殴られの毎日だったが、少し仕事も覚えてきてできることも増えてきた。忙しくない時はラーメンも作らせてもらったり、ギョーザの巻き方を教えてもらったりしていた。

休憩時間にウェイトレスの一人と一緒に賄いを食べていて、こんな話になった。

「ジョージさんが入ってきた時、何日くらい持つだろうかねえって、皆で賭けてたんだよ。」

賭けてたって・・・。

「あのいじめ方見てたら、何日も持たないだろうねって皆言ってた。」

俺はいじめられてたのか？

気づかない俺も俺だが、そんなことをする店も店だ。

まあいいか。俺はこうして生き残っている。それに、こういう話をするということは、何とか俺も店の一員として認められたということだろう。腕はまだまだだったが毎日仕事に来て、まがりなりにもこなしているんだからな。そりゃそうだ、ここでダメなら他はない、日本に帰らなきゃならないと思って必死にしがみついていたんだから。

そんなある日、ヤマさんが声をかけてきた。

隣の席が空いているとはいえ、やはり飛行機の座席は窮屈だ。寝ているつもりでも体が固まった状態で全然寝た気がしない。

それでも3、4時間は寝たのだろうか。窓から外を見てみるともう明るかった。

飛行機の中は起き出した乗客でざわつき始めていた。

とりあえずフライトアテンダントにコーヒーをもらってタバコに火をつける。

到着まではまだ数時間あるはずだ。のんびり行こう。

隣のおっさんも昨日で懲りたのだろう、まったく話しかけてこなかった。別に他人と話すのが嫌なわけじゃないが、そんな精神状態でもなかったし、何より面倒くさかった。

前のスクリーンで日本のニュースをやリだした。ヘッドフォンをつけてチャンネルを合わせる。

天気予報やら、経済ニュース、芸能ニュースなどやっているが、どれも面白くない。しばらくは俺には関係ないことばかりだし、頭が一杯なのか空っぽなのか分からない状態だった。

バッグから成田で買った本を取り出して読み始めたが、目で活字を追っているだけで全然頭に入ってこない。まあいいさ、どうせこの本は何回も読み直すことになるんだ。

トイレに行ってみたら、まだ歯ブラシが残っていた。順番が違うがまあいいだろうと、とりあえず歯を磨いて顔を洗った。ひげは伸ばしっぱなしだからそのままだ。

出てみると何人かが順番待ちをしていた。朝は皆トイレに行くものだ。皆を待たせてちよつと気まずかったが、少しさっぱりして席に戻った。

ほどなく朝食が配られた。飲み物とは聞かれ、オレンジジュースとコーヒーと答える。コーヒーは後でまたお持ちしますがと言われるが、かまわずもらった。カップに一杯や二杯では全然足りない。

それにしてもアメリカのオレンジジュースはどうしてこんなに美味しいのだろう。初めてアメリカに行ったとき飛行機の中で飲んで以来、俺はオレンジジュースが大好きになっていた。

食べ終わる頃に、入国のために必要な書類が配られた。俺はビザを持っているので税関の申告書だけでいいのだが、ビザウエーバーの用紙なども手元に来た。

すぐに書き終わったが、隣のおっさんが手間取っているようなので声をかけてみた。

案の定、日本語と英語の両方で書いてあるにも関わらず、書き方が分からないらしい。

別に嫌っているわけではなく話すのが面倒だっただけだし、ちょっと悪かったかなという気もしていたので、罪滅ぼしのつもりで手伝ってやると、とても喜んでいた。

そこから先はそのおっさんとうんでもいい話をして時間を過ごした。

と、アナウンスが入る。

「当機はまもなくロサンゼルス国際空港に……」

やっと到着か。飛行機に乗った時の気負いはどこへやら、普通の旅行者のようにやれやれという気持ちになっていた。

一回大きく伸びをしてから座席を元に戻し、シートベルトをした。ちょっと早かったが、どうせ後でやることだ。多分あと三十分くらいはあるだろうから、うとうとしたままでいよう。

飛行機が高度を下げ始める前に愛美の写真を一度見て、軽く目を閉じた。

肩の力が抜けて、いい意味で開き直っていた。

ここまで来たらもうどうしようもない。やるしか俺に道はないのだ

から。

「お前、まだあそこに住んでるのか？」

「あそこって、そのさくらホテルに住んでますけど。」

「お前、うちに来るか？」

「はい？」

「うち、今三人でシェアして住んでんだよ。一部屋余ってるんだけど、お前、仕事続けみたいだしよ。」

「下宿とかそういうことですか？」

「いやいや、シェアって言ってな、皆で家賃を出し合って住むんだよ。家を共同で借りてるだけだ。共同生活でも何でもないし、お互いに干渉もしない。」

「はあ。」

「っていうか、いちいちリトル東京でお前をピックアップするの、面倒くせえんだよ。うちからなら直接行けるだろうが。」

「家賃ってどれくらいですか？」

「350ドルでいい。電気代とかはその中から出すから。」

「350ドル・・・安いっすね。でも、ちよつと考えていいですか。」

「うるせえ。つべこべ言わずに住め。」

「ヤマさん、昨日の話なんですけど。」

「おう、いつ来る？」

「いや、それなんですけどね、実は俺、日本に女置いてきてて、必ず呼ぶって約束してるんですよ。どうなるか分かんないから一緒に来なかったけど。で、實際来てみたら思ってたより何とかなりそうなんで、金が出来たら近いうちに呼ばうと思ってるんです。そしてたらアパートとか借りるつもりなんで、せっかくヤマさんのところに引っ越しても何カ月かで出ることになっちゃうと思うんですよね。」

「馬鹿、お前、すぐ呼べばいいじゃねえか。それならメインベッドルーム空けてやるからよ。二人で住め。うちは男ばかりだけど、その部屋なら風呂もトイレも別に付いてるから問題ねえだろう。」

どうしても俺を引き込みたいらしい。だが、俺にとっても悪い話ではない。

家賃は安くなるし、部屋は今よりは広くなるだろう。正直なところ知らない他人との共同生活は面倒くさいような気もするが、どうせ家に帰っても寝るだけだし。

「わかりました。じゃあ、ホテルの部屋代今月一杯まで払ってるんで、月末近くに移ります。」

「おう、じゃあ、27日の木曜日にするか。俺と休み合わせとくからよ。」

先週愛美に電話した時のことを思い出す。

田舎に帰ってしばらくは大人しくしていたらしが、ただ妹の家に居候というわけにもいかないので、街で皿洗いをしていると言っていた。

あの愛美が皿洗い・・・。

そこまでは考えてなかった。

聡明で頭が良く、人当たりもいい愛美がそこまで身を落としていたとは。

愛美曰く、どうせ長い期間じゃないからちゃんと就職してもかえって迷惑をかけるから、だそうだ。

家賃はかからないからと、週2〜3回だけ働いているらしい。

自分のことばかりで、愛美の後の生活まで考えなかった。考えが浅かった。

それを思ったら、また違った苦勞をかけるだろうが、一日も早く呼んでやった方がいい。

そう思っていた矢先だった。

27日が来た。

「なんだ、お前、荷物こんだけか。」

ヤマさんが車で迎えに来てくれた。

「来た時のままですから。」

俺の荷物は来た時のバックパッカー一つで十分収まっていた。

ヤマさんの家はロサンゼルスダウンタウンからフリーウェイで15分くらい東に行ったところにあった。意外と店やマーケットも多く、道路も広い。ちよつとした地方都市といった感じだ。

それにしてもどうしてロサンゼルスは横に横にと広がった街なんだろう。

ちよつと買い物するにも、これではかなり歩かなければならないだろう。俺も早く車を買わなければ。

構造的にはタウンハウスと言って三軒が繋がっているのだが、中に入ってみて驚いた。

リビングが滅茶苦茶広くて天井が高い。中二階のようなところがあり、そこにキッチンとダイニングエリア、バスルームがある。階段で二階に上がると二つの部屋とバスルーム、その他に俺が住むメインベッドルームがあった。

今まで住んでいたところが住んでいたところだけに、逆に広すぎて不安になつたくらいだ。

他の二人の住人は居なかった。一人は会社員なのだが滅多に帰ってこないし、もう一人は寿司職人で昼から夜中まで仕事、その後遊びに行ってから帰って来て朝方寝るから、ヤマさん自身も滅多に会わないらしい。それはそれで俺にとっては気楽かもしれない。

俺の部屋もとても広かった。端の方にヤマさんが貸してくれたベッドがあった。スプリングはふにやふにやだ。クイーンサイズだが、この部屋では小さく見える。

言っていた通り部屋の中に洗面所とバスルームがあった。ウォーク
インクローゼットまであった。

さすがに掃除をしてあるようには見えなかったが、それほど汚れて
もない。簡単に片付けて掃除をしたらすぐ住める状態になった。
一応荷物を開いたが、タンスも何もあるわけではない。服はクロー
ゼットにかけられるものはかけて、その他の下着などはそのまま床
に並べた。ちよつと広すぎるかなと思った。荷物がないので殺風景
だ。

夕方になってヤマさんにスーパーマーケットに連れて行かれた。
マーケットは初めてではないが、やはり大きい。見たことがないフ
ルーツや野菜も沢山置いてある。

しかし、何より驚いたのはヤマさんの買い物の仕方だ。

大きなショッピングカートに食料品が山積みになつていく。

誰がこんなに食うんだ？ヤマさんは独り者だし、大体普段は店で食
べてるじゃないか。

「いいんだよ。うちにはいろんな奴が来るんだから。」

そういう理由で特に根拠もなく適当に買っているようだ。まったく
ヤマさんらしい。

その日の夕食はヤマさんが作ってくれた。言っていた通り何人か客
も来ていたから、賑やかな夕食になった。俺も手伝われたが、店
の物以外作ったことがない。切り物とかの準備だけで、殆どヤマさ
ん一人で作った。普通コックは家では料理しないと言うが、この人
は料理するのが好きらしい。

お客のお土産でケーキをもらったので食後のデザートにした。コー
ヒーは俺が入れる。料理は出来なくてもコーヒーだけは日本に居る
頃からずつと入れてきたからちよつとは自信がある。少しは格好が
つくだろう。

食事が終わってくつろぎながらしばらく皆で話をした後、お客も皆帰っていった。

洗い物や片づけを終えてリビングに戻ると、ヤマさんがおもむろに電話を持ってきた。

「おい、電話しろ。」

「どこに？」

「お前の女のところに決まってるじゃねえか。」

「ああ、引越す話はしましたから。じゃあ、住所と電話番号だけでも教えておこうかな。」

「馬鹿、何言ってるんだ。アメリカに来てって電話するんだよ。」

ちよつと待て。それはいくらなんでも早いんじゃないのか。ここでちよつと落ち着いて、様子を見てから呼ぼうと思ってるんだから。

早く呼びたいのはやまやまだが、まだ何の準備もできていない。

いや、ちよつと待ては俺の方だ。

考えてみたら、何の準備をしようんだ？この後何か状況が変わるのか？いずれにしてもいつかここに住むなら、今と何が違うんだ？大体、日本を引き上げてアメリカに渡って来た俺にとって、それ以上には決断が必要なことなんてあるのか？何とか仕事も見つかった、とりあえず今すぐ強制送還になりそうな気配もない、多分ヤマさんにも騙されてない。ないのは金とビザだけで、それ以外は問題ないんじゃないのか。

「向こうも呼んでくれるの待ってるんだろ？早く呼んでやれ。」

そうか、ヤマさん、結構考えてくれたんだ。とんでもなくデタラメなオヤジだが、いいところあるじゃないか。急と言えば急だけど、ヤマさんの言う通りだ。

うん、そうだ、そうしよう。愛美も喜ぶに違いない。

嬉しさがこみ上げてきた。また愛美と暮らせる。今すぐ電話して愛美を呼ぼう。こんなに早く愛美を呼べるとは！

俺は受話器を手にとった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3340d/>

「ジョージ。」

2010年12月1日08時44分発行